

---

# 意気地無し先輩との珍妙な日々

紺とすん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

意氣地無し先輩との珍妙な日々

### 【Zコード】

Z5988X

### 【作者名】

紺とすん

### 【あらすじ】

田の前で愛についてのゴタクを並べるこの人は、数週間前にわたしの長年の思いを木つ端微塵に粉碎した人だった。「はいはい、よく聞いとけ。愛というのはつまり、執着なのだ」「・・・先輩、黙ってください」今頃いつたい、何しに来たのか。意氣地無しで口だけ達者なワケありの先輩と大学生のわたしが過ごした、珍妙でたまに切ない日々。

## (一) こわもつか一本釣りで

「おまえ全然わかつてないよ。あのね、だから愛つてこいつのは・・・」

今日もまた、口だけ達者なこの人の愛に関する説教もしくは「ゴタクがむなしくひびく。

ここは何もどこかの講堂などではない。通っている大学の近くにわたしが借りた、古びたアパートの一室である。

こんな珍妙な事態をどうしろとこいつのか。よりによって愛についてのゴタクを、なんでこの男からぐどくど聞かされているんだろう、わたしは。神様おしえて。

田の前の男に最初に会ったのは、この男が高校二年、わたしが同じ高校の一年のときだった。

一年生のとき、わたしはクラスを代表して文化祭の実行委員になつた。別に積極的な性格だったというわけではない。クラスに希望者がいなくてくじ引きになり、四十分の一の確率のそれを引き当ててしまつたのだ。

そう、昔からやつかりいことを引つ張つてくる素質があつたのだろう、と今にして思う。

文化祭実行委員は、会長をはじめとする生徒会役員や執行部の指示を仰ぎつつ活動する。当時、生徒会の副会長だったのがこの男なのだ。

ちなみに、生徒会役員は選挙で選ばれるが、生徒会執行部員は、自薦他薦に話し合いといつあいまいな基準で選出され、人数もその年によつて違う。というか、一般的の生徒にとって、誰が執行部員を務めているかなんてことは、意識せずに済む話である。

その上、執行部員のほとんどが、生徒会役員によって文化祭実行委員の中から一本釣りされてくるなんてことは、ほとんどの人が知らないはずだ。わたしも知らなかつた。

そしてわたしは、二年生のときは文化祭実行委員にはならずに済んだ、かわりに、生徒会執行部に所属するはめになつた。一本釣りされてしまつたのである。

要は、文化祭実行委員と生徒会役員の接触が多い文化祭の準備期間中に、使い物になりそうな人間に役員が目星をつけるのだ。

この場合、使い物になりそうな人間というのは、何か指示を与えるとそれをやらずにいられない、という人種で、カリスマ性やリーダーシップはもちろん不要だ。要領はいい方がいいのだろうが、要領がよければうまうまと釣られることもないわけだから、自然と要領の悪い人間が多くなる。事実、その学年の執行部員は女子はわたくしだけだったが、男子は見事に全員、人のよさそうなタイプだった。

この男はわたしが一年、本人が三年のときも連續して副会長を務めた。三年になるときは会長に立候補するのではと思われていたが、会長に立候補して見事その座を射止めたのは、前年この男と同じく副会長を務めていた女子の先輩だった。

この人を仮に姫川先輩としておこう。姫川先輩は、凛とした雰囲気をまとつた美人だつた。優秀な人でもあつたが、やや人見知りのところもあり、あまり人の上に立つのは得意ではなさそうだつた。だから姫川先輩が生徒会長だった期間、実質的にその役割を担い、影に日向に会長を支えたのは、この男だつた。

そういう性格の姫川先輩がなんだつてまた生徒会長に立候補なんでしたのかというと、先代の生徒会長の強力なブッシュ説が有力で、多分正解である。先代会長を仮に速水先輩としておく。速水先輩は姫川先輩のさらに一つ上の学年、つまりわたし가一年のときの二年生だつた。

この姫川先輩と速水先輩というのが、後々語り継がれるような美

男美女、成績優秀力アップで、「お互いを高めあうおつきあい」をしていくとかで、教師からも公認のお墨付きをもらつよう間柄だつた。速水先輩の卒業後も、もちろんその交際は続いていた。

速水先輩が姫川先輩を推したのは、その人見知りを克服させため、というのが専らの噂だつた。他に適役の立候補者もいないとならば、一般的な生徒としても美人を会長にかかげるのはやぶさかではない。ということで、賛成圧倒的多数で彼女が会長に選出された。

凛とした美人で成績優秀、しかし実は人見知り。最強である。

速水先輩は、この男（もう面倒なので便宜上、北島先輩と呼ばせていただく）、北島先輩が会長職をうまくサポートするだろう、といつところまで見切つていたはずだ。

北島先輩が姫川先輩に叶わぬ思いを寄せていたことまで、速水先輩が知つていたかどうかは定かでない。でも、案外知つていたのかもしれないと思う。

そう、北島先輩は姫川先輩が好きだと、姫川先輩に振られた、とかいう噂が、ひそかにささやかれていた。当の北島先輩は、そんな噂を気にする様子もなく、副会長の仕事ぶりにも私情をはさむ様子は見られなかつた。だから、それは根も葉もない噂だという人もいた。

でも、北島先輩が姫川先輩を好きだつたというのは事実だとわたしは知つている。

だつてわたしは見てたから。ずっと北島先輩を目で追つてたから。

だから、好きだという噂は本当でも、振られたという噂は嘘だということも知つていて。もし実際に思いを伝えていれば、まず振られただろうと思つけど、それができるほどの度胸はない人だつた、この男は。

昔からずつと、北島先輩は意氣地無しで弱虫で卑怯だった。

そういうわたしも、高校時代には自分の思いを伝えることができ

なかつた。

しかし、大学生になつてから、わたしはきつちり北島先輩に思いをぶつけよつとした。えらい。よくやつた。自分を褒めたい。

ただしその長年の思いは玉砕した。それも先輩得意の逃げの戦法によつて。

たくさん泣いて、体重も一ヶ月ほど之間で5キロぐらい減つた。そして、少しずつでも、ふつ切れるように頑張ろう、ダイエットばんざい、最近よひやくそう思えないこともないようになつてきた。それがどうなんだ、今になつてこの事態。

## (2) 金魚のこと

そもそも、大都大学最難関の法学部の入試を突破した北島先輩を追いかけて、わたしは同じ大学に入学したのだった。法学部は成績的に無理だつたし興味もなかつたので、文学部で。

こんな男を追いかけて大学まで決めてしまつとは、なんて浅はかな若氣の至りか。後悔しきり、ふんだりけつたりだ。家計だつて楽ではなかつたのだから、地元の専門学校や短大、あるいは就職とう道を探るべきだつたし、実際この男に出会わなければ、そうなつていただろう。

執行部員時代のわたしは、よく働くコマとして、この男にわりと目を掛けられていた。

わたしが何のために、ムキになつて執行部の仕事や、さかのぼつて文化祭実行委員の仕事をこなしていたかなんて、気付くような甲斐性はもちろん先輩にはない。あんなに尻尾を振つて、従順な犬みたいて、いつもその姿を探してたわたしの気持ちなんて、先輩にとつては、道に落ちてるアイスの棒みたいなもの。

それでも、大学入学が決まつたときに恐る恐る連絡をとつてみると、昔のよしみで喜んでくれ、その後はときどき、食費にも事欠くわたしを食事にさそつてくれるようになつた。

あわよくば同じサークルに、と思っていたが、司法試験を受ける予定という先輩が入つていたのは法学研究会とかいうお堅いサークルで、わたしなんかはお呼びじやなかつた。

だからその場所が色氣も何もなく、女子学生の姿すら珍しいような安っぽい定食屋や居酒屋ばかりであつても、いつだつて食事が済むとハイ、サヨナラという素っ気なさであつても、おじつともううばかりの気まずさがあつても、わたしは先輩に会えるその時間のた

めに、大学に籍を置いていたよつたものだつた。

その食事にしたつて、いつでも先輩と二人きりというわけではなく、先輩の友人の男子学生が何人か一緒にことも多かつた。そうだろうが何だろうが、誘われればいつだつて、ホイホイとついていった。アジフライ定食なんかを食べながら、先輩は得意げに教授秘話やなんかをとうとうと披露する。一人だけのときは、高校時代の思い出話が出ることもある。でも不自然なほどに、姫川先輩や速水先輩の話題は避けられていた。

相変わらずよくしゃべる人だ、やはり弁護士なんかには向いてるのだろうか、でも実は気弱な性格が露見して、費用を踏み倒されたりするんじゃなかろうか、などなど思いつつ、だいたいにおいてわたしも呑気に話を聞いていた。

もうこのままの関係で十分幸せじゃないか、そう思い始めた頃。先輩周辺に一人の女子学生の姿が見られるよつになつた。

それまで大学では、先輩のまわりに女の人の気配を感じもしなかつた。だから気にしてなかつたけど、考えてみれば、その意氣地無しで弱虫で卑怯な本質がバレなければ、けつこうもてるはずの外見はしている。おまけに口だけは達者だ。

もしくは「く稀に、例えはわたしみたいに、意氣地無しで弱虫で卑怯でもまあいいか、と思う人もいるかもしねない。

この女子学生の名を、仮に月影さんとしておこう。月影さんは、悪いことに、姫川先輩と雰囲気が似ていた。姫川先輩よりだいぶ明るく積極的な感じはするが、立ち姿なんかがよく似ている。

北島先輩に話しかけるその姿を一日見たときから、わたしは今までの心地よい関係はもう終わるのだ、ということを悟つた。

どの道、心地よいけどこんな嘘っぽい関係はいつか終わると、はつきりしていたはずだ。だからいつそ、月影さんに感謝してもいい。しないけど。

月影さんは先輩と同じ法学部で、学年はわたしと同じ一年生だったが、それまでその存在を知らなかつた。多分行動範囲があまり重ならないのだろう。もし見た事があれば、すぐ気付いたはずだ、先輩に会わせたくない人だと。

わたしは一人が親密になつていく様子を、ただ黙つて見ていた。先輩からの食事の誘いは以前同様にあつたし、わたしも何食わぬ顔をしてついていった。その席で本人から月影さんの話題がされることはなかつた。でも他の男子学生がからかう様子から、月影さんが熱心に働きかけてそろそろ王手をかける寸前、先輩がのらりくらりと対応していることが見て取れた。

もう、はつきりしてくださいよ先輩。蛇の生殺しはやめてよ。  
自分のことを棚に上げ、わたしはまったく自分勝手に、先輩の相変わらずの煮え切らなさに苛立つた。

さすがにもう無理だ・・・そう思つたのは、アパートの小さな水槽で腹を上にして浮いていた金魚に気がついたときだつた。この金魚は唯一、わたしが先輩からもらつたものだつた。

あるとき一人で食事をした後、店を出たところで小学生らしき女の子に話しかけられた。どこぞで金魚すくいをしたらしく、金魚が一匹入つたビニール袋を持っていた。家では飼えないからお兄さんどうにかしてくれと、初対面のその子がいう。

それを先輩がにっこり笑つて受け取り、その後で結局わたしに下賜されたというわけだ。そう、もらつたというより、押しつけられたといった方が正しい。

でも、これあげるよ、大事に飼つてよと、先輩が言つたのだ。わたくしがもらわないわけないじゃないか。

それから慌てて金魚の飼い方やえさのやり方をネットで調べ、思つた以上に弱い生き物であることを知り、それこそ大切に飼つていた。人には言えないが、夜には主に先輩に関する話題で、話しかけたりなんかしたりして。

その金魚を死なせてしまった。いつから餌をやつていなかつたか覚えていない。昨日今日死んだのではないかもしない。それにすぐ気付かないくらい、わたしは心があろそかになつていた。北島先輩と月影さんの姿ばかりが頭に浮かんで。

大学には、数は多くないが信頼できる友人もいる。友人もその頃には、顔色が悪いと心配してくれていた。

友人の一人、ここでは仮に美奈と呼ばせてもらおう、美奈には、わたしが高校時代からずっと、先輩に思いを寄せていることも、先輩の豆腐の角みた的な性格も、話してあつた。だが、月影さんのことまでは話してなかつた。

ただ、わたしが知らなかつただけで月影さんは学内にファンクラブがあるほど有名な人だつたらしいので、わたしの落ち込みを見た美奈も状況を察していたかもしれない。

## キタジマ先輩の奇矯な高校時代（閑話）

「つむ。これはいい。やはり正面に座つて見るのが一番だ。  
いや、ほんとこ。この子が必死な感じで書いては考え、書いては  
考えする様子は、猫が無心に前足を舐める様子にも似て、愛らしい  
な。

「おい、ちょっと待て。ここを見なおしてみる」

「このように親切に指導することによって、この子のオレに対する  
尊敬の念も、いやがうえにも増すに違いない。

後輩のこの子・・・仮にムラサキちゃんとしておこづ、ムラサキ  
は、生徒会副会長であるこのオレが、職権を正当に濫用し、文化祭  
実行委員の中から生徒会執行部に一本釣りしてきた子である。

職権濫用を更に進めれば、執行部員をオール女子で固めることも  
できなくはなかつたが、現一年のムラサキの学年では、女子はこの  
子だけである。

執行部員は、文化祭前などは学校側に内緒で泊まり込み作業、な  
んてことになるため、正直言つて男子の方が扱いやすい。それに、  
美人生徒会長と噂の姫川が、女子にいじめられた経験でもあるのか、  
執行部に女子が多いのを嫌がつたという事情もあつたのだ、残念な  
がら。

「つまでもなく、オオカミの群れの中に羊を一匹放り込むような  
ヘマをするオレではない。ムラサキ以外の執行部員男子の人選は、  
人畜無害なタイプであるかどうかを選定基準とした。これらのボン  
クラ男子諸君には、オレの卒業後も手下として、ムラサキの情報を  
流してもううつ所存だ。

「まあ、こりゃよかつたが。問題はこの子が若干、鈍いと  
いうことである。

オレがこれだけアピールしているにも関わらず、この魅力のすべてが伝わっているかどうかが、はなはだ心もない。先代の生徒会長、速水先輩なんかは、「おまえは考え方がジジむさいし変態だ」などと失礼なことを言つていたが、こう見えて、体育祭なんかでは黄色い声援が飛んだりするのだ、ムラサキ以外の声帯からは。

もうちょっととこう、「せんぱあーい、ムラサキ、おべんと作つて来たから食べてね?」みたいな展開にならないものか。

これまでのところ、いつだつて先に話しかけるのはオレの方だ。

「先輩、聞いてますか。これでどうでしようか」「  
つたく、ボケるにはまだ早いんじゃないですか、といつよつなつぶやきが聞こえたのは気のせいだろ?」

「うむ、うまく修正できている。いいだろ?」  
そつ言つと、ムラサキはほんのわずか、ふくれつらをしてジト目でにらむようにオレを見た。

「うむ。いい。この顔はいい。

これで今夜もばっちりだ。

さて。

次なる指導を熱心に行おうと身構えていたオレの情熱に気付かず、ムラサキは「これ会長に提出してきます」と、書類を手に立ちあがつてしまつた。

ムラサキは、生徒会長の姫川に何やら憧れをいだいているようである。まあ、姫川は美人だし成績も優秀だが、ムラサキとはまったく違うタイプだし、憧れてもしようがあるまい。

だからオレこそが、ムラサキにムラサキ本人が持つ魅力をわからせてやる必要があるのだ。  
立ちあがつたムラサキに、慌てて声をかけた。

「ムラサキは、猫みたいだね」

相当な勇気を動員してこのように褒めてやつたといひ、「ゴミ箱のフタを見るような目で見られてしまった。

「わたしはどうちかっていうと、自分を犬だと思つてますけど」

しまつた。犬派だつたか。褒め方を間違えた。

そこへ当の姫川が、書類をかかえてやつてきた。

「ちょっと北島君、防災面で揉めそудだから、一緒に来てくれる?」「はいはい、ただいま参ります。じゃ、おまえ今日は、この辺で  
がつとけ」

ムラサキがタイミングを失つて持つたままになつていた書類、それを手を出して受け取り、後ろ髪を引かれる思いを抱きつつ、姫川にしたがつて歩きだした。

ムラサキがオレを、というか姫川を、田で追つているのがわかつた。

「ううこうとも、この子はひどく心細いような顔をするのをオレは知つてゐる。

もしムラサキが望むなら、ずっとムラサキの隣りについて、ムラサキの魅力について、のべつ幕なしに教えてあげるのに。あんな心臓に悪い表情はさせないので。

でも、望まれてないんだよなあ、オレ。ゴミ箱のフタだもんなあ、オレ。

先代の生徒会長、速水が卒業するまでは、ムラサキが田で追つていたのは、姫川でなく、むしろその彼氏である速水の方だった。まあ二人いつしょにいることが多かつたから、両方を視界に入れてヤキモキしていたのだろうが。

速水・・・あれはあんな顔して、悪魔のようなヤツだ。惚れて

はいかんと、何度も注意しようと思つたことか。

あれは去年、まだムラサキが初々しい一年で文化祭実行委員、速水が三年で生徒会長、オレと姫川が二年で副会長を務めていた頃のことだ。

放課後、たまたまムラサキと鉢合させしたので、その機会を的確にとりえ、副会長としての自分の凄さをアピールしてみた。このとき既に、ムラサキはかなり気になる存在になつていたのだが、ムラサキの方からは特に反応が返つて来なかつた。しかたなく、

「氣をつけて帰りたまえ」

と、さわやかな先輩ぶりを見せつけてから、リリースした。

ふと氣がつくと、ハンカチが落ちていた。

うむ。ムラサキのものであろう。

いくら一次元がもてはやされる昨今であつても、もちろん、ここでこの匂いをかがなれば、高校生男子として変態である。

というわけでハンカチを拾い上げて堪能していた。ところを、速水に目撃された。

悪魔のような速水は、それを他言しない代わりに、自分の卒業後も含めて今後、姫川の虫よけとして完璧に機能すること、次期生徒会長として立候補するはずの姫川の仕事をサポートすること、この一点をオレに約束させたのである。

うむ。まあこれも、青春といつヤツである。こつして幾多の苦い経験を積みながら、オレはますます素晴らしい人間に成長していくのである。

だから待つててね、ムラサキちゃん。



### (3) 木つ端が微塵（前書き）

読んでくださった方、お気に入り登録してくださった方、ほんとにありがとうございます。

とても励されます。

まだいろいろな機能をなかなか使いこなせていないので、失礼があつたらすいません。

それから、アルファポリスに登録しました。  
引き続きどうぞよろしくお願ひします。。。

「閑話」の前、(2)からの続きです。

### (3) 木つ端が微塵

「めんね」めんねと泣きながら、死んだ金魚を夜の公園に埋め、わたしはいよいよ決心した。長年の思いを伝えて、決着をつけようと。

そこでわたしは智恵をしぶって、先輩がごまかせない方法を考えた。間近にせまつたわたしの誕生日、その日に会ってくれと先輩に頼んだのだ。

何の因果か、月影さんとわたしは誕生日が同じだった。それを知った時には、なんともいえない気持ちになつた。なんでこの人と自分が同じ誕生日なのかと。

それでも、大学も同じ、好きになつた人も（多分）同じ、ということは、運命だつたのだろうか。立ち位置はだいぶ違うのに。だとしたら、なんだか嫌な運命だ。

断られたら、すっぱりあきらめて、新たに楽しい青春を謳歌しよう。わたしはそんな風に考えて、自分を励ました。そんなきれいごとであるわけないのに。

わたしは人を試すような、嫌な嫌な人間になつてしまつていた。人のせいにしてごまかすような、嫌な嫌な女になつてしまつていた。きっとわたしは先輩にふさわしくないのだろう。

でも、先輩のことを知るまでは、こんなに嫌な人間ではなかつた。だからこれはぜんぶ、先輩のせいということにする。  
あるいは先輩の胡散臭い説教のことばを借りれば、愛のせいともいつ。

そして案の定、前日になつて、先輩はその日会うことを見つけていた。電話一本で。それも、月影さんることを暗示することさえなく、

急きょ実家に帰省しなければならなくなつたといつ、腹の立つ理由をつげて。

逃げられた。体中の血液がざつと音をたてて落ちていくような感覚の中で、わたしはそう思つた。

それから一週間ほどたつて、実家云々の話はまあ嘘ではなかつたことがわかつた。あの日、先輩の父親が手術を受けることになつたそうで、父親のその後の病状は安定して回復に向かつているものの、一時期は危なかつたといつ。

その情報とともに、それまでのようになり一人で食事する」とも、もうできなくなつたことがはつきりしてしまつた。わたしは選ばれなかつた。

そのうえ、それ以前のひと月ほどは、父親の体調が思わしくないため、大学を休学するか、最悪やめて、家業を手伝うべきかと悩んでいたらしいことも耳に入つた。

そんなこと一言も聞いていなかつたわたしは、木つ端微塵に吹き飛ばされた。

先輩の実家は、わたしの実家から車で三十分足らずのところにあるはずだ。高校時代の話をするついでにでも、どうして話してくれなかつたのか。そんな事情を抱えて、なんていつも、あんなに楽しそうにしてたのか。そんなにもわたしは、信用されていなかつたのか。あんなに優しく笑っていたのに、どうしてこんな、残酷な仕打ちができるのか。

それが今から、ほぼ三週間まえのことだった。何かを食べる氣にもならず、外出する氣にもならず、ぐっすり眠ることもできず、美

奈をして、「ビビめ色の生活」と言わしめたそんな生活からなんとか少し浮上して、お腹がすいたり、眠くなったりするようになつてきた今日この頃。

世間一般は夏休み。

わたしも以前から決めてあつたバイトにせいを出し、お金稼ぎに没頭しつつある今日この頃。

ぐぢこようだが、先輩の「せ」の字も口に出やしない、わたしが地の底からなんとか這い出すあがらうとしてくる今田この頃。

あの男が、先輩が、やつてきたのだった。愛に関する「タクを並べるために。

その日は朝から雨だった。そんな筈はないのだけれど、あのビビめ色の日々には毎日雨が降つていたような気がするから、それ以来、雨は大嫌いだ。

夏休み中の平日は、すでに決まつているファーストフードのバイト。基本は毎週木曜日から休憩をはさんで午後七時か八時まで、ほぼ毎日。週末は週末で、単発で割のいいバイトを入れるつもりだった。とにかく忙しくしていたかった。

平日だったのでファーストフード店での接客中、珍しい客があつた。

同じ学年、同じ学部の男子学生と、美奈。取つている講義がけつこう重なつてゐるようで、その男子学生には何度か話しかけられることがあつたのだが、あいにく名前を覚えていなかつた。そこで再び名前を教えてもらつた。ここでは仮に小野寺君としておこつ。

心配性な美奈のこと、何かのついでにバイトの様子を見に来てくれたのだろうと、そのときは思つた。

バイトをあがつてきて帰ろうか、と携帯を確認すると、美奈から

「ユー、もお先輩のことなんか忘れちゃいな」という某事務所社長みたいなメールが入つていて、店を出たら雨の中、小野寺君が待っていた。そういうばイトが終わる時間を聞かれた気がする。

小野寺君いわく、わたしが小野寺君の顔を覚えていない可能性が高いので、わたしと親しい美奈に聞いてバイトのことを知り、一緒に来てもらつたのだという。

そんな話を聞くと、わたしに特別な関心があるのかと思つてしまいそうだが、だまされてはいけない。何せわたしは、ある程度は親しいと思っていた人に、大学をやめるかも知れないという一大事を伏せられていた過去を持つ女だ。

おおかた美奈が、おせっかい心を起こして、小野寺君に頼みこんでくれたのだろう。

小野寺君は、まあいわゆる、ナイスなガイだ。はやりの服装に髪型、さわやかな語り口、大学で話しかけられたり姿を見たりした時も、同じような感じの女子学生に囲まれていた印象がある。

もしも世の中の人間を、月影さんタイプとわたしタイプの二つに分けるとすれば、いうまでもなく、月影さん側に属する人である。今までいろいろ心配してくれた、美奈の気遣いは心にしみて、素直にうれしい。でも正直、まだ今はこの種の気遣いはいらないし、忙しくも楽しい予定が満載な感じの小野寺君にも申し訳ない。

結局その日、小野寺君はわたしの古いアパートの近くまで雑談をしながら送つてくれて、そのままスタスタ帰つていった。

「おい、おまえ」

小野寺君の背中を見送つてから、玄関の鍵をあけたところで、忘れもしない人の声がして、それはもう、腰が抜けるほどびっくりし

た。

#### (4) やして先輩がやつてきた

「おー、おまえ」

小野寺君の背中を見送つてから、玄関の鍵をあけたといひで、忘れもない人の声がして、それはもう、腰が抜けるほどびっくりした。

「先輩！」

咄嗟につかまえようとして腕を伸ばし、でもあつたつと避けられて、わたしの腕は空をきつた。

「おい、おまえ。今まで、どつかの男に送つてもらつてたんだろ？」「余つてこきなりそれですか。先輩には一切、関係ないですよね？」

「まあ、やうといえばやうかもしない。だがしかし、おまえ世間知らずだし、いろいろ忠告してあげよう」

「先輩、自分は世間知らずじゃないと思つてたんですか？」

「まあ聞け。この世の男はすべからく全員、下劣な生き物だ」

おまえもな。

「家まで送るの、何か買つてやるの、飯をおいでのとこいつたつて、考へる」とはただ一つだ

いつそ先輩がやうだつたら、どれだけわたしは救われたことか。「だいたいおまえは何だよ、ふらふらふらふらして、もつとしつかり毎日を生きる」

「そのことば、やつへつたままお返しします。結局何が言いたいんですか」

「いや結局つてそんな・・・つまつ」

「つまり、何なんですか」

「つまり、愛というのは、執着なんだよ」

「・・・黙つてください」

わたしは思わず、手に持つていた鍵を投げつけた。

そしてその日から先輩は、この古いアパートにしばらくの間、いつくことになる。

次の日。天気は晴れ。

バイトが終わってアパートにたどりつくと、わたしは自分に言い聞かせた。

さすがにもう、先輩はいないだろう。いなくて当然なんだから、いなくてもがっかりする必要なんてない。だいたい昨日だって、言いたいことだけ言って後は知らんぷり、一体あの人はなんなのだ。玄関の鍵をあけて中に入ると、先輩はその日も、いた。

「おまえ遅いぞ。いつたいどれだけバイトすれば気が済むんだ」

「だから一切、先輩には関係ないことですよね」

「学生の本分は勉学。そう誰かが教えてくれなかつたのか」

「わたし、お金がないんです。知つてますよね、成績的にも家計的にも、無理してこの大学入つたこと」

「や、それはそうかもしだれないけど……」

「で、先輩いつたい何しに来たんですか」

「だからそれは、世間知らずなおまえに、男や愛と言つものの実体を教えてあげようかと。ついでに学生の本分についての講義も追加しよう」

次の日も、その次の日も。夜バイトから帰ってきて、恐る恐るドアを開けると、先輩がいた。おかげり、なんて言つてくれるようにもなった。

あのどどめ色の日々はなんだつたのか。

しかしだからといって、関係が進展するようなことは一切まったくなかった。あくまで先輩と後輩。説教する人と、される人。まあ後者の関係は逆転することもままあるが。

部屋にまで押しかけてくるくせに、手も握れないのだ、この人は。それでも、出でいけと言えるかといふと、言えない。でもずっとこのままでいられるわけがない。たゞがこのことば、美奈にも相談できなかつた。

「はいはい、よく聞け。つまり好きだ、惚れたと言つたって、そんなの何の意味もない」

「言つてみてから、ほざきなさい。」

「愛は惜しみなく奪う、と有島武郎もいつている」

「愛は惜しみなく『う、とう』トルストイのことばがあつての有島です」

文学部なめんな。成績は多分ギリギリだけど。

「いいから聞いとけ。愛は目に見えないから皆、幻想を抱く。しかし結局、愛とは醜いものなんだ」

「愛は行動を伴うもの、といつのもありますよね。マザー・テレサですけど。先輩は行動したこと、ありますか？ ありませんよね。わたし、勘違いしてますか？ してませんよね。何か言つこと、ありますか？」

「・・・ない」

これは先輩の「愛とは攻撃」に備え、バイトの前に調べておいたもの。

どじめ色の日々より以前は、とつとつとしゃべる先輩のことばをただ聞いていたことも多かったのに、反論ばかりがうまくなつて、どんどん可愛くない女になつていく。

責任とつてくださいよ、ほんとこ。

## (5) 置かたぐなご（置物）

今回おなじと聞ことと思こまく、すこませんです。。。  
読んでいただきて、ありがとうございます！

## (5) 聞きたくない

その日もまた、雨だった。珍しくバイトが入っていない日で、小野寺君から、映画でも見に行こうと誘われていた。

迷った末に、わたしは誘いを受けることにした。先輩と話せるのは嬉しい。でも、今のままじゃだめだ。先輩を見返してやりたいような気持ちもある。

小野寺君の誘いにだつて深い意味はないんだ、こちらも気軽に受けられればいい。

ほとんどやけくそみたいな感じで待ち合わせ場所に行つたわたしを見て、小野寺君は「かわいいね」と言つてくれた。

わたしが一番言つて欲しいと思つてゐる人からは、もちろんこんなこと、一度だつて言われたことはない。自分が欲しかつたのは、こんなに短くて簡単なことばだつたのかと、思わず感心してしまつた。

映画は、楽しかつた。映画の後の食事も、ただ何となくそのへんを歩いただけの散歩も。

普通の会話つて、こんなだつて。このところ理屈っぽい話ばかりしていたから、なんだか新鮮だつた。

小野寺君は、軽い、というか、人当たりが良すぎる、というか、元々そんな印象があつて、それも大きく外れてはいらないだろうけど、とても気遣いのできる人だつた。

こちらの話をよく聞いてくれて、逆に話題が途切れると、何か楽しい話をふつてくれる。黙つていてたいと思う時には、それを察して黙つしてくれる。つい、異常に空氣の読めない誰かと較べてしまふことを割り引いても、この外見でこの人柄なら、人氣があるはずだ。

そして帰り際、つきあつて欲しいと言われた。

ホットサンンドはためるとまざい、そんな事実を口にするのと同じような棒読み口調に聞こえたけれど、それでも単刀直入つてすばらしい。

わたしもそれを見習つて、返事はできるだけ单刀直入をめざしてみた。

つまり、自分はつきあつ氣はないけど、今日は楽しかったし、誘つてくれて嬉しかった、とこんな感じで。楽しかったのも、嬉しかったのも、社交辞令ではなく本心だった。

小野寺君の方は、わたしがそう答えることを予想していたようだつた。美奈から先輩のことを何か聞いていたのかもしない。もつと言えば、やつぱり美奈から何か頼まれたんじゃないかと思う。でも、そこまで確認してダメージを受けるだけの気力がなかつた。

わたしの返事に対しても小野寺君は、自分は女の子の友達が多いし、最初はそういう友達と同じように、特別意識しなくていいから、というようなことを言つた。

冷静に考えてみれば、その発言も微妙だ。一夫多妻的な感じ？でも、棒読み口調だらうが何だらうが、告白じみた話を聞かされるつてことは、わたしにとつてかなりの異常な事態だ。だから多少はパニクつていたので、じゃあ今までと同じようにしていればいいのかと、よくまわらない頭で納得したのだった。

その日の帰宅は、夜九時近くになつた。玄関のドアを開けると、やつぱり先輩はいた。

そして妙に絡まれた。

「食物を愛するよりも誠実な愛は存在しないと、バーナード・ショ

「も言つていい」

「まあ、食事は大切ですよね」

わたしの返答は、いつもよつと空になりがちだった、あることばを聞くまでは。

「まったくおまえは、浮氣者だな。同情されたのを愛と勘違いするんじゃないよ」

「！」

それは小野寺君のことを言つているのか。わたしにはもう、同情されたからって怒るようなプライドはない。でも、今のことばをよりによつて、先輩がわたしに向かつて言つのは絶対許せない。

手近にあつたハサミをとりあげて、先輩めがけて投げつけた。ハサミは先輩にはあたらず、壁に当たつて跳ね返つた。それをもう一度投げつけようと拾つたとき、ハサミの片方の刃の部分を握つてしまい、手のひらに赤い血がにじんだ。

それを見て自分がしたことの無意味さによつやく気が付いて、この人の前では絶対に泣くまいと思つていたのに、声をあげて泣きだしてしまつた。

「『めん、『めんね』

わたしが泣き疲れてそのまま寝入るまで、先輩が謝る小さな声が、子守唄のように聞こえていた。

次の日。バイトにも身が入らず、注文を何度も間違つてバックヤードに配置換えされたりして、どつぶり疲れてアパートに帰つてきた。さすがにもう先輩はいないだらつ。いないはずだ。いないに違いない。いない方に一万円。

「おかえり」

ドアを開けると、何もなかつたかのような、先輩の声。

わたしは心底ほつとした。それなのに、口から出たのは心とは裏腹なことばだつた。

「先輩、いい加減もうひとつか行つてください。人の恋路を邪魔する氣ですか」

「・・・ごめん。愛といつのは」

「聞きたくありません」

「聞いてくれ。愛といつのは執着だ。だからまだ、いなくなれない」

「先輩は、何に執着してるつていうんですか」

「・・・あの金魚は、いないんだね」

わたしの質問に答えるかわりにそう言つた先輩は、寂しそうだつた。

「人の恋路を邪魔したいとは思わない。応援したいとさえ思つてるよ」

先輩の無意味なことばを、今度はわたしが無視した。

## (6) パーティーカップが飛ぶほどの愛？

それからしばらくして、また小野寺君が誘ってくれて、今度は迷わず誘いを受けた。新しくできたお店で夕食をとり、わたしが頑固に言い張つて割り勘にしてもらつた。

食事はちゃんとおいしくて、つまり食べ物の味もわかつたし、おしゃべりも楽しかつた。

帰りはまたアパートの手前まで送つてくれたから、そこで別れた。アパートへの帰り道、月を見上げて歩きながら、小野寺君とはじめて手をつないだ。

先輩は、その日も、いた。でもいつもより、無口だつた。というか、ほとんどしゃべらなかつた。いつたい何がしたいんですか。いらいらするような気持ちで先輩を軽く睨むと、少し恨めしげな目を向けられた。

わたしは衝動的に、先輩にくぐりと背を向けた。そしてその場で、服を脱ぎはじめた。何もまとも姿になるまで、すべて。それから振り向かずに部屋を出て、シャワーを浴びにユニットバスに向かつた。

部屋を出るまでずっと、背中に視線を感じていた。でも先輩は、ひとことも口にしなかつた。

そのあと一人で布団に入ると、あんなバカみたいなことしたつてどうにもならないのに、と後悔で泣けてきた。先輩だつて呆れて泣いてしまつたかもしね。

その日は、子守唄も聞こえなかつた。

やつぱり今の状態はよくない。先輩のためにも、わたしのために

も。

先輩が悩んだ揚げ句に大学をやめる選択をしていたなら、わたしも大学をやめて地元についていつてもよかつた。いやもちろん、そんなことをしても何の意味もないし、役にも立たないだらうけど、先輩に対しても何の意味もないし、役にも立たないだらうけど、先輩に対してそれくらいの気持ちは持つていたということだ。

今だつて、先輩が望むなら、わたしにはついていく覚悟がある。でも、先輩にはそんな覚悟はない。これからもずっと、そんな覚悟はできないに違いない。

考えた挙句、ある日私は、夕食を外で一緒にとつた後に小野寺君をアパートに誘つた。

玄関のドアを開けるときは緊張した。先輩の気配は感じたが、姿は見えなかつた。

わたしの緊張を、初めてアパートに誘つたことが原因と思つたらしく、小野寺君はいつもより優しかつた。実際、思つていた以上に優しい人だつた。

わたしは自分が小野寺君を利用しているのか、それとも彼とそういう関係、つまり「青春を謳歌」するような関係になりたいのか、自分でもよく分かつていなかつた。小野寺君は別にわたしに夢中というわけではない、それはわかつていたから、都合の悪い感情には目をつぶつっていた。

ドリップのコーヒーを入れ、一人で一緒に飲んだ。ソファなんてものはないから、低いテーブルを前にして、床に敷いたラグに直接、並んで座つていた。

小野寺君の右手が、わたしの肩にそつと置かれた。意外にも少し息をつめたような表情で、こちらを見ている彼と目があつた。まつ毛が細くて長いんだな、なんて思つてゐるうちに、静かに抱き寄せられた。

田を閉じたわたしの唇に、さりとてした感触が落とされた。

そのときだつた。いきなり金属をガンガンたたくような音が鳴り、床が揺れ、「一ヒーカップ」がテーブルから落ちた。二人で慌てて外に出た。手はしつかりつないで。

「地震かと思ったら、違うみたいだね」

「うん。今はもう、揺れてないね」

「まるで、あれだよ、ポルターガイストってこんな感じかもね。計つたようなタイミングで、誰かがやきもちやいたみたいに」「ははは、そういえば近所で水道工事してるとかで、このアパートの下を水道管が通っているから、変な音がしたり揺れたりするかもしれない。回覧板がまわってきてた」

「ふうん」

回覧板なんて大学入学以来、見たこともないけど、適当なことをいつて「こまかした。

しかし侮れないな、小野寺君。やきもちの部分以外は正解だよ、多分。

## キタジマ先輩の奇矯な大学時代（閑話）

うむ。なかなか。いい眺めである。

この子がちびた湯のみを両手で持つて番茶をする姿は、リスが手のひらの匂いを嗅いでるみたいで、愛くるしいな。

だがしかし。オレはこの子を「リスみたいだね」と褒めないだけの賢さを身につけている。

なぜそう褒めてはいけないか。なぜなら、この子がリス派とは限らないからである。

この子、高校でも大学でも一年後輩となつたムラサキちゃんとの長年の付き合いを熟成させる中で、オレもいろいろなことを学んできた。その集大成を、そろそろ見せつける時期に来ているのかもしない。

ムラサキが高校一年、自分が高校二年のときに、一人は運命的な出会いを果たした。そしてオレが大学に入学した後は、折に触れ、高校時代に手厚く面倒を見てあげたボンクラ後輩たちからムラサキに関する情報提供を受けてきた。だから、わき目もふらずに受験勉強に打ち込んでいる様子から受験予定の大学まで、当然ながら把握していた。

その結果なんとムラサキは、オレの在籍する大都大学に入学することになつたのである。

これぞ運命というものではないか。

そうと決まれば、なんとかして、さりげなく、偶然に、ムラサキに連絡をとらねばならない。もちろんケータイのアドレスも入手済みだが、さすがに瓶に入れて海に流した手紙みたいに、偶然メールしたら届きました、というわけにもいかない。

どうしたものかと思つていてるうちに、オレの連絡先を手下、いや後輩から聞いたというムラサキの方から電話が来た。

ここまでムラサキから電話をもらつたことがあつただろうか、否、ない。

これはもう、何かのはずみにオレの魅力に気付いてしまつたとか思えない。この機を慎重にとらえなくては。

電話では、大学生活における金銭面のことを気にしていたから、最低でも週一回、いや一回以上は「ゴハン」を食べさせてあげることにしよう。

保護者達の受けが異常によいオレは、高額のカテキヨバイトを複数確保していたし、ぜいたくをしたいとは思わなかつたから、それほど金には困らない生活をしていた。

よつて、多少無理すれば高めの店に行けないこともない。が、ムラサキは遠慮がちなタイプだ。

さりに、オレが下心とは無縁の存在であることをアピールするためにも、いつも通つている色氣のない定食屋が最適だらう。しかも、こいつの店ならサークル仲間も通つてくるから、彼女ができると思つて羨ましがるはずだ。一石二鳥である。

と、いうわけで、今日もリストさんとこっしょに定食屋で「ゴハン」を食べたところだ。

店を出ると、いたいけな女の子が、金魚が一匹だけ入つたビニール袋を持って途方に暮れていた。

子どもにとつて、オレは必ずいぶん頼もしく見えたのだろう、金魚の面倒を見てやつてもらえないとお願いされた。もちろんオレは、期待に沿つべく金魚を受け取つた。

金魚の入つたビニール袋をムラサキの顔の前にかかげてみせると、口を開きにして見入つてゐる。

ちろちろと泳ぐ赤い金魚を追つて動く瞳は、濡れた黒猫みたいな

色だった。白眼の部分は透きとおるくらいで、うす青くみえる。太陽が当たっている部分の髪が、柔らかく光っていた。

ああ、きれいだな。

と思った。

だがしかし、である。これを口に出して言つたら、トイレットペーパーの芯を見るような目で見られてしまつことだらけ。それをやられると、しばらく立ち直れない。

「うむ。」この金魚はムラサキにあげることにしてよつ。

「いつの日か、この子はいつも皿ついであります、

「せんぱい、わたしのキンギョを見にきて」と。

そしてオレはこう答えるのだ、

「よしよし、ムラサキのああこつキンギョをさわるこつキンギョさんも見てあげるよ」

さて。

何も口に出していないのに、今現在、トイレットペーパーの芯を見るような目でこちらまれてしているのは、気のせいだらうか。頭はさほどは良くないが、勘は妙に鋭いヤツ、とこうカナゴローに分類されるのかもしれない、ムラサキは。

ぐれぐれも慎重にいかねばなるまい。

雑念を振り払つてからムラサキに金魚をあげると、一瞬だけ、とても嬉しそうな顔をした。

この子もう連れて帰つてしまつが、と思つぐらこの衝撃度ではあつたが、オレの理性は紙の六法全書のよつに厚い。

まあとにかく、よかつた。彼女は金魚派だったようだ。

清く正しくムラサキに手を振つて、去つていく姿を見送つた。

振り返ると、あの月影さんが歩いてくるのに気がついた。月影さんは、男子学生の間でのみ受け継がれる、学部内女子ランキングのかなり上位に位置する一年生である。

小さくなつていくムラサキの背中を、月影さんもじつと見ていく。よくわからないが、さすが女王の迫力、ちょっと怖いぞ。

「北島さん、お食事？」

「やあ、マツコ。なんだ、お食事だったのだ、元気そうで何よりだ。じゃ、少し急ぐので、悪魔のよつた男に騙されないように注意しろよ」

そう言つて退散の体制に入つたところ、オレの素敵な顔をじつくり見てから歩み去つた。

そういうえばサークル仲間が、来たるべき月影さんの誕生日のため、対策委員会を開くと言つていた。誕生日対策委員として誘われたが、美人は歳をとるのを嫌がるから、余計なことはしない方がいいよと、親切に教えてあげた上で断つた。

残念ながら、月影さんは高校時代の同級生である姫川に似ている。ある事情から、姫川の彼氏である悪魔のよつた男、速水に脅されていたため、姫川に似た月影さんを見ると反射的に拳動不審になつてしまつ。

なお、月影さんもオレの魅力に気付いた一人らしく、最近になつて、いろいろな働きかけをされるようになつた。

月影さんの積極性はムラサキも見習えればいいと思う。が、何とか早いうちに、円満にオレを姫川似の月影さんの視野から放逐してもらいたいというのが正直なところだ。

サークル仲間から聞いた話では、月影さんは自分のファーストネームである「マツコ」を忌み嫌つてゐるといつ。たしかにイメージとは多少違うが、テラックスな感じでいいと思うのだが。

こずれにしる、「マツ口」と呼ぶと嫌われると聞き及んで以来、彼女のことを持つ呼んでいる。しかし、今のところ効果は見えない。逆効果の感すらある。

悩ましいことじうだ。

悩みと言えば、もう一つあった。実家の父親の体調が思わしくないといつ。心配をかけまいとしているのか、電話口では深刻ではないといふばかりで、はつきりした病状はわからない。家業が父親の肩にかかっている状態であったから、できのよい息子としては、休学しても力になるべきだろうか。

休学しても、たとえば司法試験の勉強はできるだらうが、決断は容易ではない。

ムラサキとの距離も縮まってきたところだ。休学することになった最低週に一度ぐらいは、さりげなく偶然にムラサキに会えるような方策を立ててからでないと、とても彼女には話せない。つむ。早急に方策を考えねばなるまい。

それからしばらくたったある日のこと。

なんと。ムラサキの方から、会って欲しいとお願いされてしまった。今までかつて、こんなお願ひをされたことがあつただらうか、否、ない。

しかも指定された日は、ムラサキの誕生日だった。ただし、話の感じでは、本人はそれを忘れている可能性が高い。

それでも誕生日プレゼントを渡すべきか。そんなことをしたら、下心ありと誤解されてしまうか。

それともいつぞ、下心です、といつて渡すか。

そんなこんなで悩んでいたところ、もう一つの苦難に襲われた。父親の手術が決まったと実家から連絡があつたのだが、それがムラ

サキの指定した田と重なつてしまつのだ。

実家からの連絡に対し、休学の心づもりを申し出ると、そんな役にも立たないことを先走つて考えられても逆に迷惑だとすら言われてしまった。

そう言つてくれる親の心遣いには感謝だが、一度自分の田で状況を確認する必要があるだろう。幸い、手術自体は大きな危険を伴うものではないらしいが、帰省のついでに、いろいろとスッキリさせてから戻つてこよう。

そういうえば、兄をさしあいて彼氏ができてしまつたらしい、薄情な妹にもしばらく会つていない。今はさすがに心細い思いをしているだろ? だから、彼氏よりも頼りになるといふをついでに見せてあげよ。

だから、その日に会つのは断腸の思いであきらめる。でも戻つてきたり、今度こそムラサキとのこともハッキリさせて、新たなる展開に踏み出そうと思つ。

だから待つてね、ムラサキちゃん。

しかし、この後で人生最大の苦難に襲われることまでは、さすがのオレでも予想できていなかつた。

「めん、『めんね。

## (7) 言われなくても知つてます

心配する小野寺君を説得して帰つてもらひて、わたしは部屋に戻つた。

「どこのところですか、先輩。出できてください」

先輩がスッと現れた。

「何でこんなに意氣地無しで弱虫で卑怯なんですか」

何も答えない。

「先輩といつしょに行つたつていいんです。さっぱり覚悟はできます」

「それはできない。わかるだろ?」

「何ですか。なんだつたら今から高いビルの屋上に一緒に行きま  
すか。あ、でも先輩、ここから出られないんですね。じゃあ今、  
ロープを用意してきますから。鴨居はないから、どいで吊ればいい  
ですかね。朝になつて先輩が消える前に決着つけますよ」

「だめだよ。そんなの全然だめだ」

「わたし、先輩に言われなくたつて、愛は醜いって知つてます。わ  
たしにはお似合いです」

「お願ひだ、そんなこと言わないでくれ」

「なんでわたしも逝つちゃだめなんですか。バカなわたしに分かる  
ように説明してください、今ここで」

「「めん、今までオレが言つたことは全部うそ。愛は醜くないし、  
奪うものでもないし、食物の方が大切でもない」

「執着つていうのはどうなんですか。先輩が執着してるのは何です  
か?」

「それ、本当にわからないで聞いてるの?」

「こんなにあからさまに出られればわかります! そこまでバカじ  
やありません。先輩の口から聞きたいんです」

「オレが執着してるのは、おまえだよ」

「声が小さい」

「おまえに執着しています」

「もう一回」

「おまえを愛していました」

「何で過去形なんですか。何でもうと前に言つてくれなかつたんですか。バカですか。バカなんですね」

「バカです。バカがつくほどずっと前から好きでした」

「だから過去形は認めません！ 先輩、手を握つてよ。抱きしめてよ。キスしてよ。やつき先輩じゃない人としちやつたじゃないつ」

「おまえ、あんなのわざとオレに見せんな。あんなの見て喜ぶタイプの変態じやないんだよ、オレは」

「わたしだつて恥ずかしいよ！ 先輩のぶあーか、ぶあか、ばかもの、もうどうしたらいいか、わかんない」

「もうバカつて言つな、そつちこそバカな頭で姑息なこと考えやがつて」

「でも先輩バカでしょ。前からつづくら思つていたけど、あつさつ死んじやつほどバカだとは思わなかつた」

「だからあつさり成仏しないで出てきたんじやないか、おまえのところに」

「何でそんなにえらそなんですか。来るのが遅いつて言つてるんですけど」

「いいか、よく聞け。愛とは執着に似てゐるのだ。このつ身の上になつてよおく分かつた。だからつい、愛した人のといひに出てしまつ。成仏できないつてのはつまり、執着してゐつてこと同等しきもあるのだ」

「何がついつですか、何を得意げに解説してゐんですか」

手近にあつたグラスを先輩に向かつて投げつけた。

グラスは先輩の体をすりぬけて、壁に当たつて砕けた。

「いつなつてから気がつくことがあるんだよ。おまえは世間知らずだから教えてあげる。行動は生きているうちに起こす」

「あんたに言われたくない」

もつわたしの顔は、涙と鼻水でぐちゃぐちゃだった。

先輩はあの日、実家に帰る途中で事故にあって亡くなつた。わたしがそれを知ったのは、亡くなつてから一週間もたつてからだつた。どどめ色の日々の幕開けだ。

わたしと田嶋さんの誕生日は命日になつた。ビームでわたしをばかにしたら気が済むのか。

## (8) 痘と鼻水と虹と

でも、わたしはどんな形であれ、また先輩に会つことができて、嬉しかつたんだ。

「先輩・・・ありがとうございます」

「なんだよいきなり、気味が悪い」

「気味が悪いのはこっちです！」

「とにかく、この経験を糧にして、おまえも前に進んだけ。なんだかオレもすつきりしてきた」

「ダメです先輩、姿がうすくなつてきます。やだ、いなくならないでよ」

「いや、いい気分になつてきた。今のセリフ、後半だけもう一度、繰り返してもうむづか。ま、いなくなるけど」

「先輩！」

「一生のお願いだ。わがままばっかり言つて悪いが、気持ちよく送り出してくれ」

「やだ。一生のお願いつてギャグですか」

外で激しく、雨が降りだす音が聞こえてきた。

「最後にもう一つ教えてあげよつ。執着から解放するのも愛である。愛とは執着しないこと、と言い換えててもよい。うん決まった。また一つ悟つたな、オレ」

「・・・先輩つてほんとにもう、しそうがない人ですね」

「というわけでようじくため息ひとつ。

「こんなに頼まれちゃつたら、しそうがないから、わたしも前に進んであげます」

「うん。草葉の陰から応援してるよ」

「先輩。大好きでした」

先輩は、ひとつ、わたしの大好きな微笑み方でちょっと笑った。それからふっと空氣に溶けこむよつこ、見えなくなつた。とてもあつけなく。

ああ今度こそ、永遠にさよならだ。もうあの下らない話を聞くこともできない、唯一もらつた金魚もない。とつとつ手も握つてくれなかつた。

もつと先輩にやさしくすればよかつた。もつと早く、先輩に好きって言えればよかつた。

でもしようがない。約束をせられちゃつたから、これからはあまり、うじうじあなたのこと考えるの、やめてあげるよ。

顔に涙と鼻水をくつつけたまま、わたしはまたその場に倒れるようになってしまった。

夢の中で、誰かのへたっぴな子守唄が聞こえた。

翌日、田を覚ますと、もう暁の十一時だつた。ひどく頭痛がする。今日はバイトはないから、思い切り自堕落に過ごそう。

そう思つて窓を開けると、雨が上がりきれいな虹が出てた。よかつた。そんなに雨が嫌いじゃなくなるかもしけない。

部屋の中はひどい状態だつた。テーブルはズレて、コーヒーカップは落ちてラグにしみがついてるし、グラスも割れてる。きれいにしてから消えればよかつたのに気の利かない、まあでもすり抜けちやうから無理なのか、ほんとに最後まで世話の焼ける人だつたなどなど、ぐちやぐちな頭で思いながら、掃除をはじめた。

そのとき、わたしがグラスをぶつけたあたりに、汚い文字で何か書いてあるのに気が付いた。

「愛して失ったほうがいい、まったく愛せなかつたよりも  
フレッシュ・テニソン」

先輩。やつぱりあなたはびうじょうもない人ですね。未練たっぷりじゃないですか。しようがないから、小野寺君か、またはそれ以上の人を、掘まえてあげます。文学部もがんばるし、ご飯もモリモリ食べます。でも残念ながら、あなたのことは忘れません、少なくともしばらくは。

忘れなくたつて進める程度には、しっかりしてるんですよ。わたしは誰かと違いますから。

窓の外を見ると、虹は空気に溶けて、なくなっていた。  
そのかわり、すつきり青い空が田にうつった。

(8) 痰と鼻水と虹と（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

ここまで先輩中心のお話はいったん終了ですが、このあとは、オノデラ君との話で、

（同時期のほんとに短い小話を挟み、）

一年後ぐらいの「一人の話が少しだけ続く予定です。多少雰囲気が変わるかもしませんが、

その話まで含めて完結となる予定ですので、もう少しあとだけおつきあいいただけると、嬉しいです。

## オノトヲ君との微妙なる田（小説）

「このあいだのアレ、やつぱつキタジマさん來てたの?」

「え? なんのこと? 先輩は・・・」

「なにってだから、ポルターガイストの話」

「ははは、やだなあ、そんな非科学的なこと小野寺君が言つなんて。ところで小野寺君は、天国は天使に純白の薔薇派? それとも極楽浄土で金銀珠玉派? それとも」

小野寺君がわたしの手首をつかんだ。

「このこつふうにすると、おとなしくなつちやうんだよね。あと、嘘つくとき、微妙にへんな顔になるから、氣をつけた方がいいよ」

「・・・小野寺君て、こんな性格だっけ」

「性格わかるほど、いつ見てもかっこいい? とにかく、こないだの続きをしたら、キタジマさんまた出てくるかな」

「やだ、もう出てこないよ」

「やだと思つても耐えなきやダメだよ、恋愛は忍耐であると萩原朔太郎も言つている

「・・・わつこの、ものすくへ誰かに似てるからやめてくれない?

「このから先、格言は出でさせたので」「安心ください。と小野寺君が言つてます。

## (9) あれから一年

もうすぐわたしの誕生日がやってくる。わたしの誕生日と「こう」とは、・・・まあ、そういうことだ。

去年の今ぐらいまでの約三年間、わたしは意氣地無しで弱虫で卑怯な人が大好きだった。ことばにするのも照れくさいが、いわゆる初恋というやつだった。初恋というやつ特有の不器用さは全開であつたが、同じく特有の甘酸っぱさの方面は皆無だった。

それというのも、自分の感情に気付いたのと失恋したと思ったのがほぼ同時、それに自分の後ろ向きの性格やらその人のぬらりひょん的性格やらがひつ結まつて、胸の中はつつけばマイナスの感情が飛び出してくる、という状態だったから。

結論としては、意氣地無しで弱虫で卑怯だったのはわたしでした、というパターンに収まって、その人、例の先輩は、へんな人ではあつたけど、とても優しい人だった。

先輩は、今でもこんな風にときどき顔を出す。もちろん物理的（あの現象を物理的といったら科学者に怒られそうだが）な意味ではなく、ふと思い出す、ということで、わたしは無理にそれをやめようとは思っていない。逆に思い出さなくなつたとしても、それはそれでいいと思っている。

こういう心境になれたのは、最後に押しかけてくれた先輩本人と、現在みどりのぶどう像の前でブスツとした顔をしてしゃがみこんでいるこの人のおかげだ。

そういうわけで、現在わたしは、明るく楽しい恋愛を模索中である。

「たいへん申し訳ありませんでした」

模索中であるのに、なぜわたしが謝っているかというと、バイトのシフトを勘違いしていくて、待ち合わせに一時間も遅刻したからである。

「つづくん。どうやって償つてくれるのか考えてたら、楽しくなってきたよ」

「つぐなう、じゃなくて、正しい日本語は、つめあわせる、とかだよね。今日の食事代はもちろんわたしが出しましょう」

それには答えず、しゃがんだままで片手を突き出す。しようがないから、両手で引っ張つて立たせた。

小野寺君は立ちあがるとわたしの顔を覗きこみ、「ふふん」みたいに頷いて言つ。

「手を引っ張るとき、一瞬ためらつた顔がかわいかったから許す」「はあ、そうですか」

「かわいい」に類する褒め言葉を、誰かれ構わず湯水のように垂れ流す人、それが小野寺君だ。

もしも、例の先輩が「かわいい」なんて言つたりしたら、それは宝くじの一等賞、までいかなくても、前後賞くらいの価値はあったはずだが、この人は十枚買えば必ず一枚含まれている当たり、程度にしか価値はない。

しかしこの人は現在、わたしにとつて、この世で一番親しい異性であり、わたしの好きな人でもある。

そう、好きなのだ。他の人を好きになるなんて、考えられなかつた時期もあつたけど。

あの頃は、好きな相手がほかの人のことを見ていると思うと、まつ黒な気持ちになつた。

今は相手が同じようにわたしを好きではなくても、まあそれはそれで、と思う。わたしも成長したものである。

これを美奈に言つたら、そーいうのは好きつて言わないんじゃな

いの、と言われてしまつたが、いや違つ。断言する。わたしはこの人が好きだ。

そこから先のことばかり考えていると、わたしは人並み以上にまつ黒になれる素質がある、ということをしつかり学ばせてもらつた結果、こうなつた。まあ、我ながら、しつこつ極端なところは変わつてないと認めよう。

「ボケつとした顔して何かんがえてるの？」

横を歩く小野寺君が聞く。ただ隣りを歩いているだけのことが、ひそかに嬉しい。

「わたしこの人好きだな、と思つてた」

見上げて答えると、ふいと顔をそらされた。

梅雨のおわりが近づいた、中途半端なくもり空。その空を見上げるよう、そらされたままの小野寺君の顔が戻つて来ない。さすがにちょっと不安になつてきたところ、後頭部をぺしッとたたかれた。

さてこの小野寺君、出会つた当初の印象とは、若干異なる人だつた。それが嫌かと問われれば、嫌ではなくて、むしろ逆。好きだから嫌じやないのか、嫌じやないから好きなのか、そのところは謎である。

まあ、基本的には人当たりがよく、誰にでも優しい人だ。でもその反動なのか、慣れてくると、それ以外の印象も強くなつてくる。

出会つた当初は、例の先輩と比較して、欠点のない人みたいに思つてた。たとえば、今日みたいに、待ち合わせの相手が一時間も遅れたような場合。微笑んで「ゼンゼンマッテナカツタヨ」的な対応をするが、現実的なところで、文句は言わずにそのままメールしてスマートに帰る、そういう態度をとる人かと思っていた。

実際のところは、メールを入れたりして帰るのもめんどくさい、だからそのまま待つて居る、という人だった。

多分、人から嫌われたりするのもめんどくさいのだな。」

欠点がない人だなんて、勝手に決めつけてた頃は何とも思ってなかつたのに、いつの間にこんな気持ちになつたのか、とまた隣りの人の顔を見上げた。

「また心があの世に飛んでた？」

「そうでもない。考へたのは、ほんとこの世のことだよ」

「ふうん。それにしても随分、あっさりついてきたんだね」

うだうだ考へながら歩いているうちに着いたのは、ビルやら小野寺君の部屋の前らしい。

「一時間も待たされた僕がわざわざコーヒー入れてあげるから。いやもう、ほんと疲れた」

そういうえばこの人も、嫌味を言つたりするときなんかは、非常に口達者だ。わたしはそういう人に魅かれるたちなのか。

「それはありがとう。でも食事どうするの？」

そもそも今日は、ちょっと散歩でもしてから早目の夕食を一緒にとろうと約束していたのだ。

「・・・」

いつもこうところに住んでいるんだと思いながら、ドアの前でキヨロキヨロしていたら、小野寺君があきれた顔で紙袋を掲げて見せた。そうだった。新しくできたサンドイッチ専門店で、食べるものを買つたんだった。グラハムブレッドにこれでもかといふくらい、野菜だのチキンだのを挟み込んだ、かなり大口を開けてかぶりついても、きれいに吃るのは難しい類の。

「そうか、これを小野寺君の前で吃べるのか。ボロボロこぼしながら。ちょっと恥ずかしいと思つたわたしは恋するオトメ？・・・うははは、自分で考へといて気持ち悪いわ。」

「ヤーヤしていたところで、小野寺君と田があつた。  
「ほんと、あの人同情せずに入れないと」

あの人というのは、例の先輩のことだね。わたしは自分で思い出すのは平氣だが、人からこんな形で言わると、ちょっといやだ、  
といふか、ちくつとする感じがしてしまつ。  
でも、いつこう感情は、自分でも勝手だと分かつてはいる。

## (10) — 緒に見上げる曇り空 (完)

ちなみに、今の小野寺君とわたしの関係は、客観的に見れば、仲の良い友達といったところだろう。

一年ほど前に、一秒に満たない短い時間、ただの友達ならしないたぐいの接触をした覚えはあるが、それ以来、そういうことは一度もなかつた。それに、どちらかの部屋に行つたりするようなこともなかつた。

例の先輩は、こちらがそれ以上の接触でもどんと来い、と思つても、それが簡単にはできないというか、そういう発想がない人だつたのだろう。それは相手がわたしではなくても同じはずだと信じたい。

でもこの人の場合は、できないとかではなく、しないだけだ。これは相手がわたしでなければ違つんだろう、とも思う。この人には「女の子の友達」がたくさんいるみたいだから。

そしてわたしの方も、前とは違つて、友達のうちの一人みたいな関係で満足してしまつていて。

今日みたいにときどき待ち合わせて、食事をしたり、映画を見たりするだけのことが、とても楽しい。

ただ、もちろん、今まで以上に親しくなるのも、やぶさかではない。

やぶさかではない、のだが、何事にも心の準備が必要だ。

それができていれば、頬を桜色に染めてうつむいた、のようなこともしてみたかったが、残念ながら、小野寺君の部屋に赤鬼がいます、のような顔色をさらすことになつた。

鍵をあけてもらつて先に部屋に入ったわたしは、中をぐるりと見渡した。中の様子は、予想通りというか、すっきりとあまり物も多

くなくて、小野寺君らしい感じだつた。

わたしの部屋よりもちろん新しいけど、家賃はいくらいいくなんだらう、などと下世話なことを思つてしまつ。

後ろから肩をとん、とたたかれて、顔だけ振り返つたら、すぐ後ろに小野寺君が立つていた。

うわ、背後靈、とか言おうかと思つたけど、やめといてよかつた。彼の腕が肩を抱きこむように動くと、気がついたら自分の体が半回転していく、わたしは小野寺君の正面にいた。

わたしの肩にかけられた片方の手のひらが、ゆっくり背中の方におりていって、もう片方の手は首の後ろのあたりを少し撫せてから、支えるようにそこに置かれた。

彼の目が、わたしを見ている。

一気に顔に血がのぼってしまった。

目を閉じたいと思つたけど、顔が固まつてしまつたみたいに、それができない。自分の指の先を動かすこともできない。何か言つことさえできそうにない。

そういううちに、体までふるえだす。

たつたこれだけのことで情けなさ過ぎて、もうひととど泣きたい。

ほんとはやつぱり友達のうちの一人じゃ嫌だ  
もしこれで嫌われてしまつたら、これからわたしはどうじつよう  
これからわたしは、また・・・

「黙つてて」

つぶやくみたいに言つられて、背中にあつた方の手が、なだめるよ  
うに耳のあたりを包んだ。

その反対側の頬にやさしい感触が降つてくると、それでよひやへ、わたしさ由を閉じることができた。

とつちらかつていった頭の中も、少しずつ静かになつていく。

何か言つことさえできそつこない、とか思つたはずなのに、何かを口走つていたらしいわたしの唇の上に、頬の方からせりあきの感触がゆるゆると移動してきて、留まつた。

首の後ろに置かれている手のひらに少し力が入つて、わたしは多分、唇を差し出すような姿勢になつていて。

体中の神経が、手が置かれている耳のあたりと、首の後ろと、唇に集まつてしまつたような感覚の中で、固まつていた両腕を、とうりかく小野寺君の背中にまわした。

その背中が少しカーブしているのがわかつて、かがみこんでいるんだな、などと思つた。

一度やわらかくわたしを抱きしめてから体を離した小野寺君は、頬のあたりにちょっと触れるといつたり部屋の奥に行つてしまつた。

急に体のまわりの温度が下がつて、こころもとないような、さびしこのような感じがする。

それからようやく、まわりの物音が耳に入るようになつてきた。

当然のことながら。長い間口だけ達者な先輩を思つていていたわたしとしては、やつきのようなことも初めてだつた。

だから多少ブザマでもしようがないのだ、かまわないのだ、誰にも文句はいわせないので。

と、いつよひなことを考へながら、その場でつゝ立つていたら、「ぼけつと立つてないでこっちに来たら」

と、むつともな言葉がかけられたので、しおしあと足を前に進めた。

「コーヒーメーカーがポコポコいっている。いい匂いがした。

小野寺君がソファを指さしたので、すなおに座った。長い指が静かに動いて、コーヒーがマグカップに注ぎ分けられるのを、手伝いもしないで見ていた。

「はいどうぞ」

「ありがとうございます」

そういえば、これと一緒にサンドイッチを食べるはずだったのでは。と、思い当つて、せめてそれくらいはわたしが準備しようと、腰をあげた。

隣りに座つた小野寺君が玄関ドアの方を指さして、そこに紙袋が転がっているのが見える。

「落ちてるね」

「うん」

「ええと。でも、食べられるよな」

「うん」

「じゃ、とつてくれるね」

「うん」

うん、と言つたその人がわたしの手首をつかんでいるので、取りにいく」ともできず、もう一度腰をおろした。

「あのや。最初のときは、ほんとにしれっとしてたよね」

前をむいたまま小野寺君がいつ。

「最初のときつて?」

「一年も前。コーヒーカップが飛んだり部屋が揺れたりする直前の

こと

「うつ」

例の一秒未満。

「すいませんでした」

「謝るつてことは、悪いことしたつて思つてるんだ」

「・・・はい」

「あの頃はさ、かなり危ない感じだつたけど、自分でわかつてた？棺桶に足を突っ込ませないよつに相当がんばつてた僕の純情、そろそろ報われるべきだよね」

「だからいろいろ誘い出してくれてたんだつて思つて、とても感謝します」

今だつて、わたしが再びジビ色の日々に戻りず、普通に生活できているのは、この人の優しさのおかげだ。

「もてあそばれて利用されたのに、今まで君だけに恩へしてきた僕の気持ちをわかつてこるのかな」

君だけに恩へしてきた、といつ部分を中心にはじめ、断固として異論をとなえたい。が、普段この人がどういう生活をしているのか、考えないようにしていたので実際のところはよく知らない。

「小野寺君はもてあそばれて利用されるタイプじゃないでしょ」

「そうなる直前だつたよ。もしさつきも最初のときみたいだつたら、もうあきらめて捨てられようかと思った」

「うそ。ギリギリセーフ。よかつた。ありがとう赤鬼くん。

「すいませんでした」

「何考えてるんだかまつたくわかんなかった。あんなことのあるとで、聞くわけにもいかないし」

それはわたしもそうだった。そう言つたわりに、肩のところに顔を寄せた。

「今もよくわからんけど、まあいいや。もう一回、嫌いにならないでつて言つたら許す」

「えつ。もう一回つて？」

嫌な予感がしてあわてて顔を離した。

「はあ。ついさっき、そう言つてたでしょ。真っ赤な顔して」

「うそ。悶絶。鼻血。そんなベタでこつぱずかしいことを口走つていたのか。

「その気持ちに偽りはありません、つて」と見逃して欲しい、「肩がソファに押さえつけられて、今度は喉に小さな重みがのつかつて、ひえーっと思いながら、結局わたしはもう一回、その『うぱ』ずかしこじとばを口にした。

やうこわなで、いろいろなことを模索しつつ、なんとかわたしは、元気な日々を送らせていただけております。

おわり

(一〇) 一緒に見上さる雲つ空 (祝) (後書き)

ヒルサあつがヒルガゼニ申したー。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5988x/>

---

意気地無し先輩との珍妙な日々

2011年11月11日03時18分発行